

1 題材名 「食べること」を考える ―苦手な食べ物は、あったらいけないの？―

2 題材について

給食時間、3年生の教室に行くと、「この魚がおいしかった。」「ブロッコリーが苦手だけど、これは食べられた。」などと、様々な声を聞かせてくれる。その中には、「里芋が苦手で今日はちょっと…」という声もある。

子どもたちは苦手なものや量が多いものは給食を食べ始める前に調節し、自分が決めた量を食べるようにしている。量の調節をする子どもを配膳台越しに見ていると、料理から苦手な食材だけ取り除こうとしていたり、ほとんど減らした料理をまた少しとってみたりして、子どもたちは苦手なものをできる限り減らしてしまいたいという思いと、食べた方がよいのだろうという思いとの合間にいることが感じられる。

今回、そうした苦手な食べ物との付き合い方について、子どもたちが一度立ち止まって考える機会を作りたいと考えた。給食を提供する立場としては、子どもたちには給食の料理を一口は食べてほしいという思いがある。様々な味に出会って食経験を増やしてほしいからである。栄養の面や、食事が他者とのコミュニケーションの場にもなることを考えると、食べられるものは多いほうが望ましいとも思える。しかし、食べたほうが良いことはわかっているにもかかわらず、現実にはどうしても苦手な食べ物もあるだろう。栄養教諭として、専門的な知識を伝えることはもちろん重要であるが、実際の場面でのどのように考え、行動するかを子どもたちとともに考えることも大切にしたい。

苦手な食べ物を目の前にしたときの気持ちと向き合い、友達や栄養教諭の考えにも触れることで、改めて自分の食事について考えをめぐらせ、苦手な食べ物との付き合い方を長い目で考えられるようにしたい。

3 学習活動計画（2時間目／全2時間）

第1次 「食べているときの気持ち」 …1時間

食事をしているときの、自分の気持ちをふりかえる。

第2次 「苦手な食べ物は、あったらいけないの？」 …本時

4 本時の学習について

(1) 本時のねらい

苦手な食べ物とどのように付き合っていくかについて、自分なりの考えをもつ。

(2) 予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
1. 前時を振り返る。	
2. 苦手な食べ物が、給食で出たときの気持ちを表し、それをもとに話し合う。	・ 苦手な食べ物が多い子どもや、苦手な食べ物がない子どもにも配慮する。
3. 2をふまえ、苦手な食べ物との付き合い方について、自分の考えを書く。	・ 栄養教諭の専門的な視点だけでなく、自分の経験も話し、子どもたちが安心して自分の考えを書けるようにする。

□授業後の話し合いで話題にしたいこと

- ・ 子どもたちは、課題を自分自身のことととらえ、苦手な食べ物との付き合い方を考えられていたか。
- ・ 栄養教諭の関わりは適切であったか。